第２部

「学校の危機」対応研究委員会報告

危機（ピンチ）がチャンス！　一人で悩まないで

目　　次

1．学校の危機とは …… 71
（1）危機についての考え方
（2）子どもを取り巻く危機のカテゴリー
（3）危機は時と場所を選ばずに起こる

2．事例から学ぼう …… 73
（1）「学級」の柔軟なとらえ方
（2）「協働」組織を創造する
（3）保護者や地域との「共生（共創）」で学校を再創造

3．学校を「安全」で「健康」な場所に …… 77
（1）学校をすべての人にとって「健康で安全な」場所に
（2）学校を人権が守られ、尊重される場所へ
（3）教職員全体で悩みや問題を共有・共感する
（4）大切な「規律」は、みんなの意思で守り、高めよう
（5）「学級崩壊」した小学校での研修事例

4．委員会からのメッセージ …… 80
（1）「学校の危機」対応の緊急性と課題の普遍性
（2）「学校の危機」対応は人権を守り、学習の場を保障すること
（3）学校の状況を踏まえた「学校の危機」対応の指針づくり
（4）「学校の危機」対応を通して共生・協働社会を創る

1．学校の危機とは

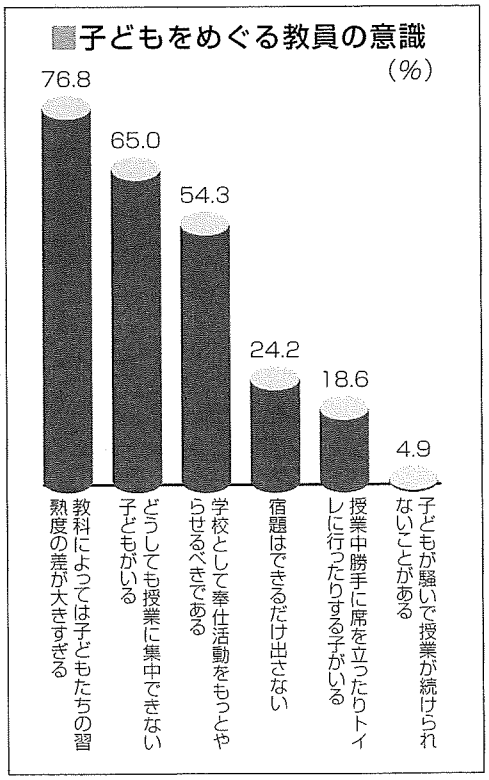
(1) 危機についての考え方

世界的に「危機」に関する問題がクローズアップされている現在ですが、学校も決して例外ではありません。児童・教職員殺傷事件や学級崩壊、校内暴力や児童虐待など、残念ながら学校もさまざまな危機的状況に置かれています。こうした危機的な状況からは、教職員をはじめ、子どもや保護者にも大きな影響を及ぼしています。

危機問題を考える上で最も重要なことは、まず「どこの学校でも、いつでも起こりうる問題である」と認識することです。そして、子どもたちはもちろん、私たち教職員のためにも、こうした危機を可能なかぎり未然に防ぎ、学校を安全で安心して過ごせる場所にするための環境づくりが求められています。

もちろん、危機と一口にいっても、教職員同士や教職員と子ども、あるいは子ども同士の関係によって生じる危機問題は、それぞれ複雑な背景があり、単に「危機」として一括してとらえることはできません。特に、学級崩壊のような問題や教職員同士の人間関係の問題は、時代や社会の変化なども含めて考慮しなければならない課題です。危機はある意味で、これまでの問題を解決するチャンスでもあります。時代や価値観の変化に応じた新しい人間関係を構築するためのステップとして、「危機をチャンスに」変える前向きな考え方が解決の糸口になるのではないでしょうか。

DATA①「学級崩壊」――公立小学校教員7000人意識調査



●「死ね」「給料よくもらえんなー」などの暴言の中、耐えている先生を見ると、自分が持っても同じと感じてしまう。人格が壊れそうになる。(30代女性)

●自信を持っていたにもかかわらず、今年、全く今までの手法が通じなかった。がまんができない子、自分さえよければよい子、相手の気持ちを考えず相手の心を傷つけても平気な子、絶えずしゃべり続けて授業のじゃまをする子……。担任としてどうしようもないことがある。(40代男性)

●学校は安全な場所だと思いたいが、教室内でえんぴつで友達をつつく、上ぐつを投げる、わりばしで目をつく、缶を投げる、2階から飛び降りる……。けが人が出ないことを願う毎日。(50代女性)

●母親的な立場で細かなことを指導すると、子どもが離れていく。口やかましく家庭で言われ過ぎているため、学校でまで注意されたくないようだ。細かな指導をする女性教師、頼りがいがなくきめ細やかな男性教師は学級崩壊しやすい。(30代女性)

※DATA①～⑤は、国立教育政策研究所と福岡教育大などの研究者グループによる調査を掲載した朝日新聞記事（2001年10月29日）より。

(2) 子どもを取り巻く危機のカテゴリー

危機を生む背景には、家庭や社会的な問題、または学校内での人間関係や出来事など、さまざまな原因があります。児童虐待やいじめによる自殺など、青少年に関する事件だけでなく、先の見えない経済問題やテロによる不安などを抱えた社会の中で生きている現在の子どもたちは、私たちおとなが想像する以上のストレスや不安を抱え、時には恐怖を感じながら学校生活を送っています。

不況やリストラなど、一見子どもたちには直接関係がないと思われる問題であっても、同じ社会に暮らしている以上、子どもたちにとっても無関係な問題はなく、同時に学校にも影響を及ぼしています。

では、子どもを取り巻く危機には具体的にどんなものがあるのでしょうか。ここでは、子どもに関連する危機をエリア別に「学校で起こる危機」、「社会で起こる危機」、「家庭で起こる危機」の3つのカテゴリーに分け、それぞれに当てはまる具体的な事例をあげてみました（下記参照）。

子どもを取り巻く危機

■「学校で起こる危機」＝立ち歩きや反抗的態度などによって学級の機能が成り立たなくなる「学級崩壊」をはじめ、いじめや対教師暴力、生徒間暴力、体罰、器物破損、学校生活での悩みによる自殺や自殺未遂・自殺願望の他、最近ではさらにスクール・セクシャル・ハラスメントなどが考えられます。

■「社会で起こる危機」＝殺人事件などの凶悪犯罪や事故の他、特に子どもを対象にした誘拐事件、低年齢化している薬物やアルコール依存などがあります。また地震や洪水などの自然災害による危機も、肉体的にも精神的にも深刻な影響を与えます。

■「家庭で起こる危機」＝親（保護者）の子育ての悩みなどからくる、子どもへの精神的・身体的虐待、養育義務や責任の放棄（ネグレクト）、保護者や家族の離婚や別居、身近な人の死や喪失などが考えられます。

(3) 危機は時と場所を選ばずに起こる

大阪教育大学附属池田小学校の事件（2001年6月8日）をはじめ、世界を震撼させたアメリカでの同時多発テロ事件（2001年9月11日）は、絶対に安全と言い切れる場所はないということを改めて痛感させました。こうした社会状況の中で、私たちは学校を危機から守るディフェンス的な対応だけなく、どんな社会であっても、子どもたち自身が自分の生き方を考えながらたくましく生きていける力を身につけられるよう、積極的な対応をしていくべきではないでしょうか。

そのためには教職員や親をはじめとするおとなたちが学校を「聖域」にせずに、時代の趨勢を的確に把握し、移り変わる現実に対して敏感に対応していくことが重要です。薬物依存や性行動についても「いけない」という結論だけを押しつけるのではなく、さまざまなプログラムを準備して、納得のいく説明をする必要があります。また、スクール・セクシャル・ハラスメントのように、なかなか表面化しにくい問題についても積極的に取り組んでいくことが大切です。

２．事例から学ぼう

この項では、学校の危機の中でも学級崩壊的現象に対しての予防や対応について、さまざまな事例を紹介します。参考にできることがあれば、工夫してみてください。

(1)「学級」の柔軟なとらえ方

(1)授業の工夫

■「１時間の中で誰かをスターに」

私のクラスは40人。正直に言ってなかなか一人ひとりに意識が行き渡りません。見落とすことも多い毎日です。授業をしていても、本当に全員が分かっているのか不安です。そこで子どものやる気を引き出そうと、１時間の中で「誰か一人でもスターにできたら」と考えました。チャイムが鳴っても教室に入ろうとしない子や授業態度もめちゃくちゃな子。そんな子もできるだけ気にかけて、どこかいいところを見つけて活躍の場をつくるようにしました。そのうち発表もできるようになり、席にも着くようになりました。今でも、時には授業中にケンカもしますが……。

絶対にしてはいけないのは、がんばってもいないのに簡単にスターにすることです。それは子どもの自尊心を傷つけるだけです。授業の工夫には、教材や教具、発問の工夫などがありますが、どの方法でも一番大切なのは子どもたちが「わかった」という実感がもてる学び合いの実現だと思います。１時間の中で誰かをスターにさせたいものです。

(2)学級活動の工夫

■「オレたちのクラスはだめクラス」

全校朝会で並ぶのも１番ビリで、整列もできない。音楽会では歌を歌わないし、授業も遅れ気味で、私語も多い。そんなクラスでいろいろやってみましたが、なかなかうまくいきませんでした。そこで遠足や運動会などの行事を利用する方法を考えました。

遠足では、現地でのレクリエーションや遠足を楽しむためのルール作りをしっかり時間をとって話し合います。そして帰ってからできたことを子どもたち自身に評価させます。運動会も同様に学年やクラス、自分の目標を明らかにして取り組みます。水泳記録会では、応援団長や一人ひとりの応援コールを決めて、クラスを盛り上げたこともあります。大変な労力ですが一つひとつ積み上げていきましょう。

大切なのは、どんな小さな事でもいいから目標を立ててあきらめずに取り組んでみること。一人ひとりと話し合い、やる気になれば必ずできることを実感させましょう。オレたちのクラスは決してだめクラスなんかじゃない。「この子たちもこれならできる」ということから始めてみましょう。きっと流れが変わるはずです。

■「少しでもできれば大成功」

学級の運営を少しずつ「教員主導型」から「子ども自治型」に変えていきましょう。朝の会や帰りの会は、子どもの自主的な活動を中心にしていきます。係や当番を使いながら自分たちで運営させましょう。少しでも自分たちでできたら大成功。子どもの様子を具体的に学級通信に掲載したり、「クラスの歴史」として掲示したりしてもいいと思います。意見交換をして、子どもたちが好きなこと、やりたいことを見つけてやらせてみましょう。小さな自信が積み重なって大きな変化を生みます。

■「陰のボスを表のリーダーに」

いつもいじめのボスだったＡくん。この子を中心に何かすばらしいことを成功させたいと思いました。そんな時、校内に「記念碑」をつくることにな

りました。A君を中心にして記念碑の実行委員会をつくり、児童会に提案しました。全校で話し合い、クラス全体でこの計画を成功させていきました。

A君のような子どもは、もともと行動力と組織力を持っている子が多いのです。あり余っているパワーを負から正のパワーに変えられないでしょうか。どんな実行委員長でもいいからやらせてみましょう。子どもの見方を変えて、こちらから積極的にかかわっていきましょう。

(3)子どもの居場所と「自分を取り戻す時間」を

■「学校に安らぎの場所をつくる」

私は、心身ともに疲れきっていた時、何日間か教材室に閉じこもって休憩時間を過ごした経験があります。また、荒れた子どもたちが「基地」と呼んで保健室に隠れ家を作ったこともありました。

学校の中にも、子どもたちの逃げ場や隠れ家的な安らぎの場所が必要なのではないでしょうか。空き教室を利用して畳やカーペットを敷く、教室に仕切りを置いて読書スペースをつくるなど、工夫しだいで学校の中でも可能です。たまには、私たち教職員も子どもと一緒に寝そべって、何もしない時間をつくることが必要なのかもしれません。

(4)子ども自身に困難な状況からの自己回復力を

■「アンケートで自己診断」

私の学級は、自己回復力を失っていました。学級崩壊の中で、子どもたちも私もどうしていいか分からなくなりました。そこで荒れている子どもたちに、他の子どもの気持ちを伝えるためのアンケートをしました。今のクラスで「何が一番問題なのか、みんなはどんなクラスにしたいのか、そのために自分にできることがあるのか」という内容でした。

否定的な意見もありましたが、多くの子どもたちは現状のままでいいと思っていませんでした。結果的にこのアンケートは、私にとっても、子どもたちにとっても自分を見つめ直す自己診断のために役立ちました。そして、子どもたちや私に現実をしっかり把握して具体的に整理し、問題に取り組む展望を与えてくれました。

(5)遊びの中から社会性や自立を

■「遊びやケンカの中から学ぶ」

休憩時間に私が子どもたちとボール遊びをしていると、突然一人の子がみんなのボールを持って逃げ出しました。遊びを中断された子どもたちは、いっせいに腹を立ててその子からボールを取り返しました。取り返された子どもは大泣き。話を聞いてみると、いっしょに遊びたいけれど、やり方やルールが分からなかったため、つい意地悪をしてしまったようです。私はその子を放っておいて、みんなと遊びを続けることにしました。そのうち、その子も遊びに入ってきて、みんなにアドバイスされていました。

これは、どこにでもある光景です。子どもたちは子どもたちなりにお互いが心地よくすごすためのルールを持っています。遊びやケンカの中でお互いが気持ち良く過ごすためのルールや「一人よりみんなでやることの楽しさ」を学びます。こうした「学び」は、地域のつながりが密接だった時代には、ガキ大将を中心に繰り広げられていたどこにでもある風景でした。私たちはもっと遊びを大切に考える必要があるのではないでしょうか。私も少し歳をとり、グランドに出るのがおっくうになってきましたが、こんなおもしろい場面に出会えるのでがんばっています。

(2)「協働」組織を創造する

(1)悩みを一人で抱え込まない

■「いろんな所でグチをこぼす勇気を」

私は、40歳を過ぎた教員です。学級が荒れ始めたとき、すべて自分の責任だと思いました。誰もが初めはそう思うようです。私は積極的に職員室や校長室、そして学年の中で学級運営や子どもの事で悩んでいることを話すようにしました。最初は「あなたの力不足」と言われるかもしれないと不安でしたが、誰かに話さないと自分を保てなかったのです。悩みを語れば楽になるのは子どもも大人も同じです。自分を追い詰めないためにも、同僚や地域の仲間たちに話し、お互いに悩みを共有していくことが大切だと思います。

(2)バリア・フリーの学級

■「いつでも他の学級に入れる雰囲気づくり」

ある日の授業中のこと。一人の子どもについていて、ふと顔を上げるとＴ・Ｔの先生が他の子どもを指導していました。この先生は空き時間などに、いろんなクラスの指導に入ります。またそれを自然に受け入れる雰囲気が、教員にも子どもにもあります。

私も気軽に隣のクラスに入っていきます。基本は学級ではなく学年集団。Ｔ・Ｔの先生も含め、どのクラスの子どもも同じように指導できる雰囲気をつくりましょう。大切なのは、学級や担任の個性を尊重し、抜け駆け的な行為をしないこと。そして「○○しようと思うの」「このプリントを使ってみない？」など、日頃から声をかけあい、連携していくことが大切です。連帯関係がある学年や学校は何かあった時、必ず助け合える教職員集団になります。

(3)開かれた学級と経験の交流

■「クラス単位授業をグループ単位に」

総合的な学習や社会などの授業では、Ｔ・Ｔの先生などと協力してグループ別学習を組んでみましょう。私は４年生の担任で１学年３クラスですが、社会科の授業では、目的別に「消防・ゴミ・水道・警察」の４つのコースに分かれて学習しました。他のクラスの子どもを知る機会にもなるし、子ども同士の交流の機会にもなり、とても楽しかったです。合同体育も効果的です。時には、クラス対抗やクラス解体チームで。学年や学校の中でさまざまなアイデアを出し合い、経験の交流をしましょう。

(4)ネットワーク作りをすすめよう

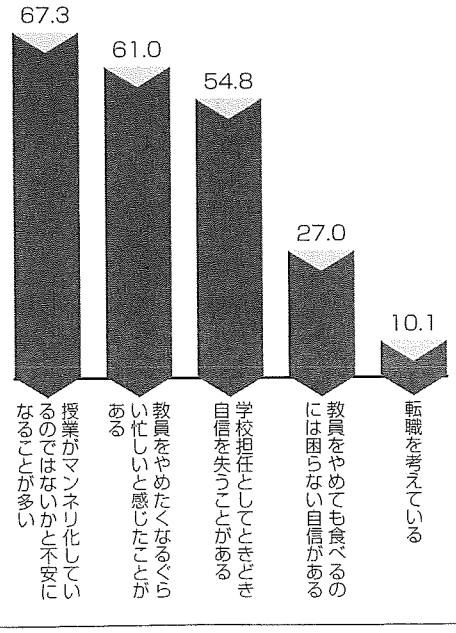
■「孤立を解消するネットワークづくり」

学級がしんどくなってきた私は、孤立感を味わっていました。学校にはお互いに悩みを打ち明けてグチを言い合い、助け合う場所がありませんでした。本来なら職員会議がその役割を果たすべきだと思いますが、今の学校では一番大切なことを話し合う時間も雰囲気もない気がします。それから何年か経ち、現在は少しずつですが、同じ様な悩みを持つ地域の仲間と話せるようになりました。「給食時間だけ担任が入れ替わり、子どもたちが元気かどうかなど、様子を見ています」といったユニークな実践も聞くことができました。

地域の仲間とつながり語り合い、気軽にしっかり

DATA②「自信喪失」――公立小学校教員7000人意識調査

■仕事をめぐる教員の意識（%）



●価値観の多様化と言われる中で、教師として「これは」と大切に伝えてきたことが、はたして生きる力の糧になるのか自信がなくなってきた。（40代女性）

●大きな教育改革の中で自分たちが受けてきた教育と、これからの教育に大きな隔たりを感じる。この先、不安が大きい。（40代女性）

●毎日、毎年同じことの繰り返しがむなしい。一生懸命訴えても裏切られて傷つく。バカバカしくてやってられない。そんなことがありながらもまた一生懸命立ち向かう。悩むこと自体イヤになる。（30代女性）

●教職20年を超えてしまいました。人間として社会人として男として何をやってきたのだろうか。休日も仕事をし、家庭よりも我が子よりも学級の子のことを気にかけてきたけれど―。教室という箱の中だけでしか生きてこなかった自分。人の生き方さえ知らない自分の狭さに気づきました。（40代男性）

グチをこぼし合えるネットワークづくりをすすめてみませんか。個人的な努力やつながりだけではなかなか難しいので、組合の力も借りましょう。

(3) 保護者や地域との「共生（共創）」で学校を再創造

(1)保護者を学校の「ゲスト」から「サポーター」へ

■「お母さんも参加して授業を創造」

「先生、宿題の出し方がおかしいんじゃない？」と言われて、家庭に出向いて行きました。ちょうどクラスが大変でとても悩んでいた時だったので、本音で相談して応援してもらうことになりました。子どもや他の親とも話し合い、お母さんたちに授業に参加してもらうことに。子どもを監視するのではなく、子どもと一緒に勉強し、時には遊んだり、掃除をしたりします。参加する保護者も当番制ではなく、来られる人が来られるときに来るようにします。こうして立ち直ったクラスもあります。

(2)子どもや保護者と学校行事をつくる

■「お父さんも学級行事をサポート」

子どもたちに「ＰＴＣＡ（子ども参加型ＰＴＡ）をやろう。何がやりたい？」と聞くと、「学校にお泊まり」と答えが返ってきました。一番クラスが荒れている時だったので、できるかどうか不安でしたし、保護者からも「大丈夫ですか」と心配する声が上がりました。でも、自分たちで言い出したことだったので、子どもたちが進んで「夜10時以降の私語はやめる、人に迷惑をかけない、勝手な行動をしない」など、ＰＴＣＡを成功させるためのルールづくりをしました。保護者も協力的で、差し入れや一緒に泊まってくれたり、ふだんはあまり行事に参加しないお父さんも、子どもたちと一緒に料理を作ってくれたり、応援してくれました。そして、子どもたちは最後までやりきりました。

(3)保護者との連携

■「その日のことはその日のうちに」

私には苦い経験があります。子ども同士のケンカがあり、一方の子どもが唇を少し切ってしまいました。原因も些細でケガもかすり傷で、すでに仲直りもしていたのでそのまま帰宅させました。保護者には次の機会に話せばいいと思っていました。ところがその夜、保護者から連絡があり、大変気まずい思いをしました。この出来事から私は、問題が起こった時は隠さず、すぐに対応することが大切だと実感しました。また、何か問題があった時だけでなく、学級通信で保護者に子どもの様子を伝えるなど、日頃から保護者と連帯し合えるように信頼関係を築き上げることが大切です。

３．学校を「安全」で「健康」な場所に

(1) 学校をすべての人にとって「健康で安全な」場所に

(1)命と健康を大切にする学校

学校は、教育と学習を目的につくられた場所であり、子どもたちにとって楽しく充実した学校生活が保障されるべき場所です。しかし、何よりもまず「健康」や「いのち」が大切に守られる「安全」な場所でなければなりません。子どもが安心して学習に励み、健康的な生活の中で、健全な人間関係が形成できる場所であってほしいと思います。

(2)危機の予防と教職員の役割

学校が安全な学習の場として機能するためには、危機的状況に対する予防や対応を検討し、備えると同時に、本来の目的である学習の場として必要な条件を整備していかなければなりません。これは、教職員の安全と健康を守ることにもつながります。教職員が安心して、心身ともに健康な状態で仕事に取り組めることが、同時に子どもたちの学習と生活を守り、保障することになるからです。そのためには、教職員一人ひとりが自分の問題として「何ができるのか、何をする必要があるのか、何を守るべきなのか」を考え、職場で話し合い、安全な場所にするための点検と整備、準備を怠らないようにしたいものです。

(3)保護者や地域と連携した危機への対応

学校だけでは「学校を取り巻く危機」に対して充分に対応できません。より確実で、より充実した危機への対応を進めるためには、必要な条件整備を教育委員会などに具体的に要求することも重要な仕事になります。また、問題によっては、保護者や地域の人と一緒に考え、保障していかなければならない問題もあります。

さらには、保護者などへ協力や支援をお願いし、時には責任を分担しなければならないこともあります。学校の「安全チェック」と「健康チェック」をそれぞれの学校の状況に合わせて点検することから始めましょう。

(2) 学校を人権が守られ、尊重される場所へ

(1)人権を保障し、開かれた学校をつくる

学校の危機管理、危機への対応は、子どもの学習する権利や人権の保障をはじめ、教職員や保護者などのすべての人の人権が尊重されることをベースに検討し、実施しなくてはなりません。たとえば、個人情報についてはプライバシーを保障する適正な管理を行い、必要な情報については、原則的に公開性を保障するものとして整理され、管理されるべきです。開かれた学校をつくり、学校に関わるすべての人と連携し協力することで、より確かな危機への対応が進められるはずです。

人権の尊重を基本として危機管理・対応を考えることは、教育の場である学校がもっとも大切にしなければならないことです。危機対応のために個々人の人権が踏みにじられ、さらに二次的な被害が発生するような状況では、危機への対処が的確に実現できているとはいえません。

(2)必要な危機対応支援策を確立する

危機への対応では、状況によって緊急に人的・財政的支援が必要な場合もあります。迅速な対応がで

きなかったために、危機を拡大させ、人権侵害を見逃したり、軽視したりする事態を生じさせることがあります。人権の保障などの尊重すべき価値や原則を考慮した上で可能な限りの対応策を確立し、学校だけでなく地域の人々とスクラムを組んで、いかなる場合でも、迅速で的確な危機への対応がとれるように配慮しなければなりません。

(3) 教職員全体で悩みや問題を共有・共感する

ある調査によると、学級がうまく機能しないなどの危機を予防し、危機の拡大を防ぐには、日頃からお互いに授業を公開したり、率直な意見交換がみられたりする学校ほど、危機への対応力が高いといわれています。

それぞれの教職員が抱える悩みや問題は、決して特別なものではなく、共通性があったり、相互に関連していることが多いものです。大切なのは、学校でのそれぞれの持ち場において、情報交換をして状況を共有し、問題の深刻さを共感しあうこと。それが専門的な指導力を身につけた教職員集団にとってもっともふさわしい問題解決の道につながります。職場での連帯を強め、協力して学校の危機に対処する総合的な危機対応能力を高めたいものです。

(4) 大切な「規律」は、みんなの意思で守り、高めよう

(1)権利と安全を保障するためのルールづくり

学校の危機を予防し、危機の拡大を防ぎ、被害を最小限にとどめるためには、何らかの「規律」を作り、みんなの意思で守り、それを高めていく必要があります。危機対応のルールづくりは、子どもと教職員の命と健康を守り、子どもの学習する権利と教職員の働く権利を保障するものでなければなりません。

また、みんなの意思で確実に実行し、時代や状況の変化に応じて常に改善していく必要があります。そしてより質の高い「規律」にしていく義務もあります。

(2)危機を予防し、的確に対応するスキルを獲得する

学校で発生するさまざまな危機を予防し、問題状況に的確に対応するには、必要なスキル（技法）を身につけることも必要になります。問題状況を迅速かつ的確に把握し、効果的な対応をとるには、あらかじめ似たような状況を想定し、仮想的にいろいろな対応手段を学び、訓練を積み重ねることが大切です。そのために必要な研修の機会を確保し、教職員全体で必要なスキルを向上させるように努力したいものです。

(5)「学級崩壊」した小学校での研修事例

CPI（Crisis Prevention Institute, Inc. 危機予防研究所）の研修

■「非暴力的危機介入法」を活用して

小学校3年生のクラスでA君を中心とする男子3人が、担任に対して反抗的で攻撃的な態度を1学期から取り続けていました。2学期に入って事態はさらに悪化し、担任は教職を退いた方がいいのではないか、というところまで追い詰められていました。授業中は担任に対して言葉の暴力を浴びせ、「あっちいけ、うぜー、うるせー」などの連発で、授業が成立しないことが多く、担任の方も感情的になって、負けてはいけないという気持ちから、命令調での対応をとり、威圧して押さえようと努力しました。しかし、そうした日々が毎日続くにつれて疲れ果て、周りからも指導力のない教師という目で見られるような感じが強くなり、わらをもつかむ思いで、2学期の終わりにCPIの研修に参加したのです。

研修によって具体的なノウハウを得たことで自信を回復した担任は、3学期からは、見違えるように堂々と生徒の前に立ってクラス運営ができるようになり、男子たちに振り回されることもなくなりました。同僚からも同じ人間でも態度しだいでこのように変化がもたらされることに驚かれています。

▒CPIの「非暴力的危機介入法」研修とは

学級崩壊、対教師暴力・キレる子どもなどの問題に対して、的確な危機管理スキルを獲得することで教師の問題解決能力を向上させ、自信を高めることを目的とした研修です。また、個人のスキルアップだけでなく、危機管理システムを校内に構築できるように、認定インストラクター制度も設けられており、危機管理のエキスパートを中心にチームが組めるように構成されています。

研修は12時間のプログラムで構成されています。基本的な危機介入モデルの紹介から始まり、子どもが不安レベルからキレた状態に発展するまでの各段階と、それぞれの段階に応じた先生側の具体的な対応の仕方を学びます。たとえば、実際に受講者が生徒役と先生役に分かれて、生徒指導場面を想定して訓練します。さらに、自分自身の感情をコントロールする仕方や、恐怖心を抱いた時に身体の安全をどのように確保するかなども演習を交えて研修が行われます。実際に生徒にむなぐらをつかまれた場合や噛みつかれた場合など、具体的な場面を想定して身体的なトレーニングをします。

また、爆発してしまった子どもを守ると同時に、周囲にいる生徒や自分自身をどう守っていくのか、キレて暴れ出した生徒に対して、お互いの安全を守りながら、プロとしてどう対処していくかもトレーニングします。最後に、興奮状態から落ち着きを取り戻した子どもへの対応を学びます。ここでの適切な対応の仕方が、次の危機の予防につながってくるので、とても重要なポイントです。

CPI認定インストラクターの資格をとるためには、さらに12時間の研修を受ける必要があります。このプログラムでは、研修したテクニックを実際の学校現場でどう応用していくかを学べるようになっています。この資格を取得することによって、自分の所属校や所属地区で自分が学んだテクニックを他の人々に教えることができ、その結果、学校や地域全体の危機に対する認識を高め、予防的対応が早期に取れるようになります。

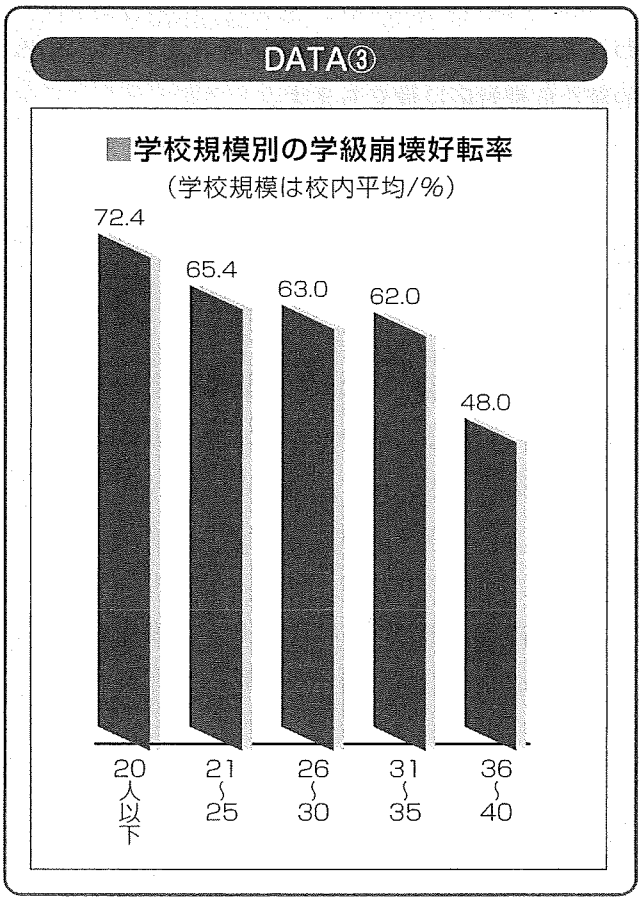
また研修プログラムには、効果的に教えられるように、参加者からの質問のタイプの見極め方、挑戦的な質問への受け答え方、反抗的態度を取る人の対処の仕方、やる気や協調性のない教職員との連携の取り方、ロールプレイの持ち方、教職員の自信の高め方、反省会の持ち方なども学べるように設定されています。

現在、学校には「危機をすでに経験した学校」と「これから経験する学校」の2種類の学校があると言われています。専門的な知識とスキルを持つことが、的確な危機対応に役立ちます。

4．委員会からのメッセージ

(1)「学校の危機」対応の緊急性と課題の普遍性

現在、学校や子ども、教職員はさまざまな危機に直面し、その対応に日夜真剣に取り組んでいます。学校を取り巻く危機は、近年、急に浮上した問題だけではありません。むしろ、今までその深刻さや対応の重要さが社会全体で的確に認識されてこなかったことに、課題解決の重要性や難しさがあるのだと思います。しかも、学校や子ども、教職員を悩ませる危機の多くは、日本だけではなく世界中の子どもや教職員にとっても、普遍的な問題でもあります。



(2)「学校の危機」対応は人権を守り、学習の場を保障すること

危機への対応を誤ったり、危機的な状況の存在に無自覚であったりすると、子どもの学習が保障されず、子どもや教職員の人権が侵害され、学校本来の目的が実現されなくなるおそれがあります。危機を予防すること、直面する危機へは迅速で的確な対応を図ること、被害を最小限に抑えて拡大を防止すること、危機の経験からより質の高い危機対応能力を身につけることは、学校教育に関わるすべての人にとって、喫緊の課題になっています。

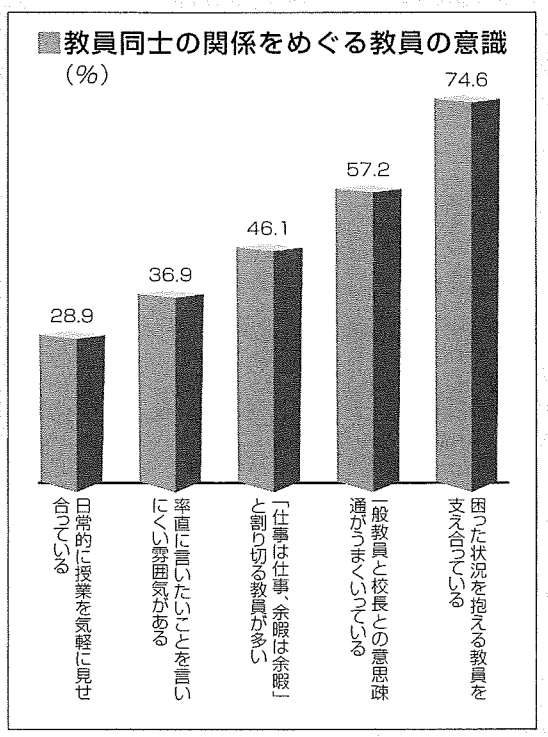
本委員会では、各学校と教職員が主体的に危機への対応に取り組み、子どもと自らの生命と人権を守り、学習の場を保障し、働きがいのある職場づくりを目指すために、どのように課題を認識し、どんな対応策があり得るのかについて検討を重ねました。

(3) 学校の状況を踏まえた「学校の危機」対応の指針づくり

学校の危機と一口にいっても、それぞれさまざまな要因が絡み合って発生するものですから、危機への対応も画一的なものではなく、各学校現場の状況に応じた臨機応変な対応が求められます。これからは各学校において、学校の状況に応じた具体的な指針や対応策を作成する必要があります。

危機を回避し、危機の被害を最小限に抑えるために最も重要なことは、学校の関係者すべてが、危機の可能性を自覚し、学校の危機は「あってはならないが、ありうる」ことを認識することです。そのためにも、子どもと教職員すべてが学校の危機的な状

DATA④「人間関係」── 公立小学校教員7000人意識調査



●「校長の言い分ばかりが押し通される。イエスマンが増えては、生きる力を持った子を導くことができないと思うが、言われたことをハイハイときく力を育てろと言われているよう。良いといわれた学校を金太郎あめのようにまねる中間管理職など、閉塞状態。（40代女性）

●ベテランの先生は、指導力のある人と仕事を押しつける人と極端。なのに給料はたくさんもらって、新採の方がよっぽどまし。（30代女性）

●教員同士あいさつしても応答なし。子どもにあいさつしなさいといっていながらとても残念。（50代女性）

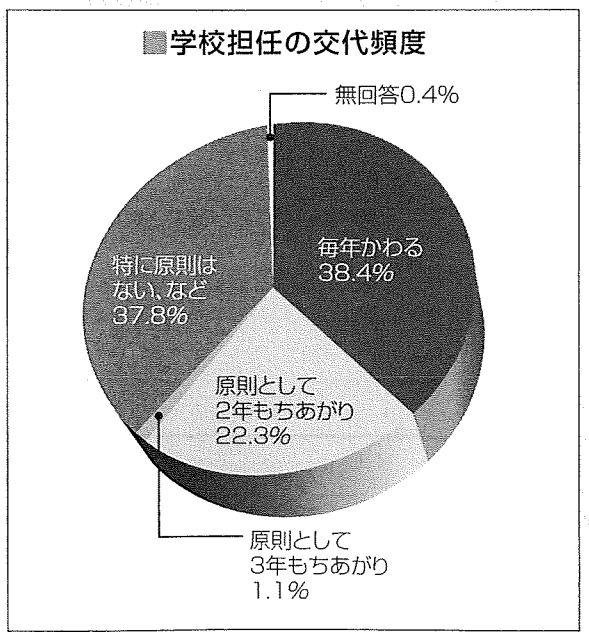
●同僚と休日に遊びに出かけるが、校内にいる時のように「○○先生」と呼び合う雰囲気をこわせない。そこから抜けると、校内ではずされる気がして。（20代女性）

●教頭、校長となっていくために努力することが正しい教員の道のように見られることが多い。多くのことを捨てなければ実現しないのなら、あえて目指す必要性はない。（40代男性）

況に関心を持ち、自主的、自律的に危機の予防や管理に対処しなければなりません。また、教育行政からの支援を受けながら、各学校の教職員がそれぞれの立場に応じた危機対応の責任を引き受ける必要があります。

本報告書が、学校を取り巻くさまざまな危機への認識を高め、各学校が危機対応に関する指針を作成する上で、少しでも参考となれば幸いです。また、今後さらに各学校での具体的な危機対応の取り組みを参考とし、より質の高い「学校の危機」対応の指針や対応策づくりが、全国的な取り組みとして継続することを期待します。

DATA⑤



(4)「学校の危機」対応を通して共生・協働社会を創る

学校教育を危機的な状況に陥れるさまざまな状況に対して、子ども、教職員、保護者や地域が共生や協働を目指し、連帯して立ち向かうこと、さらにそうした活動を通じて、すべての人が成長し、自主性や自律性を高めていくことが重要です。

学校だけでなく、社会全体が価値観の多様化に向かい、話し合いや共同作業、団結などが難しくなっている今日、現代的な教育課題である「学校の危機」対応に対し、教職員集団をどう構築していくのか、組合活動の未来をどう考えていくのかが、時代の焦点の一つと言えるでしょう。教職員団体としての力量が問われる課題でもあると思います。

「学校の危機」対応研究委員会

研究委員　川西　玲子（社会・生活システム研究室）

研究委員　新福　知子（ＣＰＩジャパン）

研究委員　平野　克博（広島県教職員組合）